

【平成23年度】

～「水が織りなす安曇野今昔物語」講座～

～豊科編～

第4回



と き : 10月7日(金) 午後7時から

演 題 : 【道祖神、庚申、二十三夜等の民間信仰と伝統行事】

講 師 : 安曇野市豊科総合支所市民福祉課 課長

高原 正文さん

第4回「道祖神、庚申、二十三夜等の民間信仰と伝統行事」 H23. 10. 7

□はじめに 豊科町の民間信仰

(寺壇制度と民間信仰)

(信仰に名を借りた講)

□民間信仰とその行事

1. 道祖神とその行事 道祖神は実に複雑な性格の神ながら、これほど親近感を持たれる神も珍しい。

(1)道祖神への祈りとその源流

①道の神(旅の安全を守る神)



熊倉町村の道祖神

○町村の道祖神が「行」という字の間に「首」の字を入れて「道」と読ませているのはなぜか。



古代中国の行路の神の思想

○江戸時代の旅人は道中、病気、けが、追剥、雲助、夜盗、幽霊、オオカミなど幾つもの危険を覚悟しなければいけなかった。どこで死んでもそこに埋葬してもらってかまわない。

②塞の神



吉野梶海渡の字「才の神」双体道祖神、自然石(焼け焦げあり)、御柱

○自村と異界の堺にあって自村へ災厄、病気、悪霊、悪党らまかまがしいものの侵入を防ぐ。

○「道切」の習俗の代わりに塞神を村境に置く。自然石である場合が多い。

③子どもを守る神 →子安(子育)地蔵は子授け、安産、育児の祈願。



法蔵寺境内の子安地蔵 (これは道祖神碑ではありません)

→道祖神の本地は地蔵菩薩とされる→地蔵信仰と近接点がある。

○関西では子どもにとって地蔵盆の行事が道祖神祭りにあたる。

○早死にした子が塞の河原で父母を思って積み上げる積み石塚を邪鬼がくずして何回も一から始める苦境を地蔵菩薩が現れて救いの手をさしのべる。(御詠歌『西院河原地蔵和讃』)

○大護八郎『石神信仰』によると「日本各地に見られる多くの<賽の河原>は、これまた本来の伝説ではなく、道祖神の項で述べたように、村境即ち辺境をもって古語で<サイ>といい、そこにあって悪霊・妖鬼の侵入を塞ぎ止めるさいの神と地蔵信仰との習合の上に成立したものと考えることに異存はなかろう」としている。

④性の神(生産神)



八景山の男根状道祖神と明治19年の道祖神(松本市梓川)

○男根石道祖神の分布は安曇野市豊科には皆無といえるが、松本市入山辺の徳運寺や宮原地区などの山間に顕著に見られる。天明の大飢饉で草くらいしか食べるものがなく餓死者が続出した地方では強大な男根石の威力で大飢饉という災厄の再来を防ごうとした。八景山でも同じ発想と見られる。松本市里山辺北小松の八坂神社境内には男根石と女陰石が祀られている。性は生産を司るが性の呪力は災厄を防除する。

○「嫁して三年子なきは去る」 昔は、多産は困るが家存続のため後継ぎは必要。子を産むのが嫁の役目という「家」優先の考え方が強烈だった。なかなか子どもにめぐまれないので夫にも相談できず、夜中に境内に来て男根石に大事な部分を摺りつけ子宝授かりを祈ったという悲しい話が松本市里山辺の北小松の八坂神社に伝わる。「去る」とは離縁のことである。

○浅間温泉の道祖神祭りは巨大な木彫の男根を神輿がわりにし嫁入り前の娘を跨がせて練る行事だが、これは多産を願っている。

○男根であれ女陰であれ、要は「陰陽合一」が五穀豊穡につながる。「日月清明、風雨順時、五穀豊穡、天下泰平」などはそうした思想を物語っている。

(2)道祖神碑の種類 豊科には 135 基ある(除:自然石、信仰目的でない道祖神彫刻)。

◎石造道祖神・木造道祖神の全てが御神体。自然石道祖神も御神体。民間信仰の石碑は供養塔(宗教行事の記念碑)である場合が多いが道祖神信仰は違う。道祖神碑のないところに道祖神講はなく、庚申塔(庚申供養塔)なきところでも庚申講はありうる。最近観光用や会社 PR 用に新しい道祖神の造立が目立つが、いくら道祖神を似せてもそこに祭祀が伴わなければ偽物といわざるをえない。本来道祖神は村落共同体としての「木戸」が挙げて祭祀する神(ごくまれに個人の家の屋敷神)であり、地縁社会の背景なき道祖神は道祖神まがいの彫刻でしかない。道祖神を愛する心からとしても地縁社会の背景がないものは建てて終わりである。したがってここでは偽物は除外し、御神体としての道祖神のみを問題とする。なぜなら道祖神信仰の根源には古代から続く増殖する石への畏怖(「さざれ石のいわおとなりて」)の念は不可欠だからである。

◎なぜ安曇野にこれほど道祖神碑が多いのか。

→拾ヶ堰開削以降、増産増収の祈りが高まり道祖神信仰が高まった。増産が「木戸」の各家の経済を潤し、道祖神製作費用の拠出に耐えられた。

→材料となる花崗岩が烏川水系で得られやすかった。梓川水系のものも得やすかった。

→有能な高遠石工が近世高遠領だった山形、朝日など比較的近くにいた。安曇郡にも石工存在。

◎道祖神碑の種類

①像碑(双体像) 豊科地域には 42 体しかない(酒器像 11、握手像 28、笏軸像 2、笏扇像 1)。安曇野を代表するものの多くは穂高地域に目立つが豊科でもなかなか美しいものがけっこうあることに気づかされる。

○酒器像(祝言像) 男女二神が結婚に不可欠な三三九度の酒器をもつ。

○祝言跪座像 像容は八景山の明治 19 年の道祖神を参照。女神が跪く。酒器像の一種。

○握手像 像容は男女が握手をしている。肩を抱くものを肩抱握手像という。

○笏軸像 平安貴族の衣冠束帯の男神が笏を、十二単の女神が巻物をもつ。豊科地域は 2 例。

○笏扇像 男神が笏を、女神が扇をもつ。豊科にも 1 例。

②文字碑 神代文字も含め豊科地域はこれが 92 体と圧倒的に多い。寺子屋師匠や真々部に多い寺院との関連が指摘されている。とくに真々部の真珠院(現金龍寺)にいた蜀山和尚の揮号になる

文字碑は注意される。

③自然石 →豊科地域では男根石と呼べるものはない。吉野梶海渡、熊倉町村、熊倉二本木にある。

④その他

飯沼飛行士記念館向かいの無銘碑

(3)道祖神への祈りを具体的に道祖神の像容に見る・具体例 2～3

①本村西村の菊花紋道祖神→安曇野市有形文化財。戦時中菊の紋が物議をかもした。皇室紋でない。



□銘文「弘化三年二月吉日本村西村中 帯代三十両」

○不老長寿の祈り→謡曲『菊慈童』、宮中行事「菊の被綿」

○夫婦和合の祈り→夫婦和合は子宝につながる。若い男女ほどよい。

○五穀豊穰への祈り→感染呪術により人間の男女の性の営みに感化され、植物の♂雄蕊と♀雌蕊が結合し「実り」を促進する。(参考:フレイザー『金枝篇』)

②踏入本郷の道祖神



○日天・月天の意味するところ→庚申塔の像碑ではよく目にするが道祖神は珍しい。

○軸に書かれた「看之人延命」の意味するところ→長寿の祈り

○道祖神にあえて化粧するいわれは何か⇒災厄防除の呪い+良縁を願い美しい娘に成長

③上飯田たつみ原の文字碑

○巽新田の集落が村の弥栄を記念して建てた。道祖神造立の目的も個人的な祈りから村全体への幸せを願う祈りへと変わってきている。

(4)道祖神の「嫁入り」の習俗について

①道祖神盗みの美称 天保十年代に流行した。道祖神の碑陰に「帯代」は嫁入り支度金を意味する。



下堀金村下村から盗んだ道祖神



盗まれた道祖神のあとの道祖神

(5)道祖神信仰の伝統行事

①三九郎

□三九郎は正月に行う道祖神の火祭りで本来子どもたちから成る道祖神仲間によって営まれた。年頭の厄を焼き払い、新年を言祝ぐ火祭りのことである。三九郎という言い方は松本平固有とあっていいが他の地域では「どんどやき」というところが多い。三九郎は近世農民たちが負った三つの苦労(重い年貢<重税>、凶作飢饉、疫病)のことだという説と道祖神祭りの司祭者である神官福間三九郎のことからきたとする説とある。

○三九郎の囃し歌

この囃し歌を聞いた、新宿中村屋を開き荻原礫山と親交があった相馬愛蔵の夫人相馬黒光(キリスト教徒)は礫山の傑作「女」のモデルといわれるが、穂高在住の折、三九郎の囃し歌のあまりの露骨さに安曇野に愛想を尽かしたという。性に関わる歌が多いが、根底には夫婦和合、五穀豊穰の祈りがある。

○三九郎歌の歌詞の一例 信濃教育会南安曇部会編『南安曇郡郷土調査叢書 第一篇 年中行事篇』(昭和10年郷土研究社)所収のものを1,2紹介したい。

「弁慶坊弁慶坊。初めて都へ上る時、隣のじじから五百文、裏のばばから二百文、槍と長刀買

いこんで、禪一つで飛び出した。ワーワノワー。」

「三九郎三九郎。あっちの山からつんばくら、こっちの山からつんばくら、お寺の屋根で屁ひって、鷹にけられて泣き出した。ワアワノワー。」

②御柱

○豊科では吉野の町、梶海渡、中村、中原と成相、新田で行われる。神迎いの飾りがつけられるが成相、新田のものには大小の福俵がつけられる。

③福俵曳き

○だし 福俵をなぜ「だし」という。山車曳行とみなすと「風流」という芸能の一種とみなせる。

○所作の寓意するところ

a.人間ピラミッド 俵の下の方が苦しんでいるのに、なぜ頂上の若者は勝鬃をあげるのか。

b.放射状に曳き縄を張りぐるぐる回したあと、地面にたたきつける所作

c.慶事があった家へ納入の際に行われる俵奪い合いの綱引き

④真々部殿村の御年頭 神官の姿の木造道祖神を持って各家に訪問、年始のあいさつをする。

⑤夏の道祖神祭り 七夕時期におこなうところが多いので七夕の笹飾りがつく(中飯田、踏入本郷、踏入恵光院など)。「道祖神」と書いた角灯籠を据えるところもある(踏入恵光院など)。

⑥道祖神のとおせんぼ 南穂高細萱田屋でかつてみられた。豊科の飴市の時分に行った。

2. 庚申

(1)信仰の概要と講 仏教系と神道系の二系統ある。仏教系が主流。

庚申講の仲間で運営。庚申の日に当屋の家に集まり夜更かしをする行事。60日に一ぺん廻って来る庚申の日の夜は、寝ている間に三尸虫が体から抜け出し、その人間の罪科を天帝に告げ口すると、その人間の寿命が縮むとされ、夜更かしをする。庚申掛軸をかけ念仏を唱えるとは言っても、実態は宗教に名を借りたコミュニケーションの場となり、ちょっとしたごちそうが振る舞われた。「話は庚申の晩に」で男性主体の集まりになり農作業など様々な話に花が咲いた。

(2)庚申塔 豊科には52基ある。庚申塔がなくても庚申講のあるところは珍しくない。



真々部中村二十三夜まの庚申塔

①庚申塔の性格 庚申講の供養塔。文字のものと像碑とある。

②像碑 日天・月天、青面金剛、三猿(見ざる、聞かざる、言わざる)、鶏(申の日が明けると酉)

(3)庚申講の行事の事例 豊科町寺所観音堂南

「この講は観音堂付近の六戸と四ツ屋の一戸と原村の戒寺堂西の一戸の計八戸から成る。観音堂から離れた、違う木戸の二戸が加わっているのが特徴である。

庚申講は初度と仕舞度のほか、間度を四月と十一月に行う。初度と仕舞度は庚申の日に行うが、間度については庚申の日とは関係なく当屋のつごうのいい日に行う。

当屋を決めるくじびきは二年に一度、仕舞度の時に行う。一から四は一年目の当屋、五～八は二年目の当屋ということで、当たりの番号に意味をもたせた阿弥陀くじをひく。

講をひらく前日の晩、当屋は講員全員に「あすの晩六時から庚申するのでおでかけください」と通知をする。講の当日、当屋へ前の当屋が皆よりも一足早く庚申掛け軸を持ってくるので、当屋はただちに座敷の床の間に掛け、その前にしつらえた卓袱台に煮しめや酒やお茶菓子を備え、ろうそくに火をつけておく。講員が集まったら一堂お参りをする。この講ではお庚申様は「作神様」であり「縁結びの神」であると考えられている。そのあと一同会してお茶を飲む。この時に世間話のほかに、必要な稲作の話や野菜作りの話をする。お茶は 30 分ほどで終わり、直会の酒宴になる。講員八戸で一升の酒と決めているが、話に花が咲き、二升は飲んでしまう。酒の肴は煮ころがしのどんぶり二つと漬物と決まっており、刺し身は食べてはいけないということで出さない。酒宴がひとくぎりついたところで、当屋は夕食を出す。夕食は芋汁が通例である。夕食後もお茶を飲みながら四方山話をするが、遅くも午後 10 時半には散会する。

庚申仲間の務めは仲間うちで葬式があった場合に、穴掘りをするということであったが、今は火葬にかかわったので、納骨の前に墓掃除をする程度である。葬式の時は親類以上の扱いを受け、上座に座るが、香典もそれなりで 1 万円差し出す。ただしおとりもちも務める。

戦前・戦中、そして戦後しばらくの間、講の仲間は共同作業をして助け合う仲間でもあった。特に稲の脱穀ともみすりは共同でおこなった」(『豊科町誌 歴史編・民俗編・水利編』より)

(4)庚申にまつわる伝統行事

①上野真光寺の初庚申参り 松本平に二系統あるうち安曇野で信仰される上野庚申(仏教系)→松本市は寿下瀬黒の米沢庚申(神道系)。一種の代参。おみやげにハネネコというおもちゃを買ってくる。ハネネコを「蚕の棚に吊るすと蚕が当たるといい、又子どもの身につけておけば達者で生長するという」(『南安曇郡郷土調査叢書 第一篇 年中行事篇』)

3. 二十三夜の月待ち

(1)信仰・行事の概要

①信仰 二十三夜講は二十三夜の下弦の月の出を待つ行事。月を信仰の対象とするが女人中心の講である場合が多い。月の満ち欠けが人間の生死や不老不死に関わるとの考え方があった。母なる大地や水界の象徴たる女性原理としての月という考え方が広く農耕民の間に根を下ろすようになった(石田英一郎)。女人講の場合、祈願の中心は妊娠、出産、育児に関するもの。月と女性の「月の物」(月経)との間に因果関係があると信じられた。三は「産」に通じる。月に住む月天子の本地仏は勢至菩薩でその縁日は二十三日。例外的に二十夜講を男の講とする川手では二十二夜が女人講である。その場合二十二夜講の本尊は如意輪観音。ポーズが安産のポーズと信じられた。

②行事 二十三夜講の行事は今は真々部殿村に残るだけで他は廃絶して久しい。

(2)二十三夜塔 豊科には 27 基ある。二十二夜塔は川手の光の野田と宗林寺に各 1 基ある。



法蔵寺山門わきの二十三夜塔

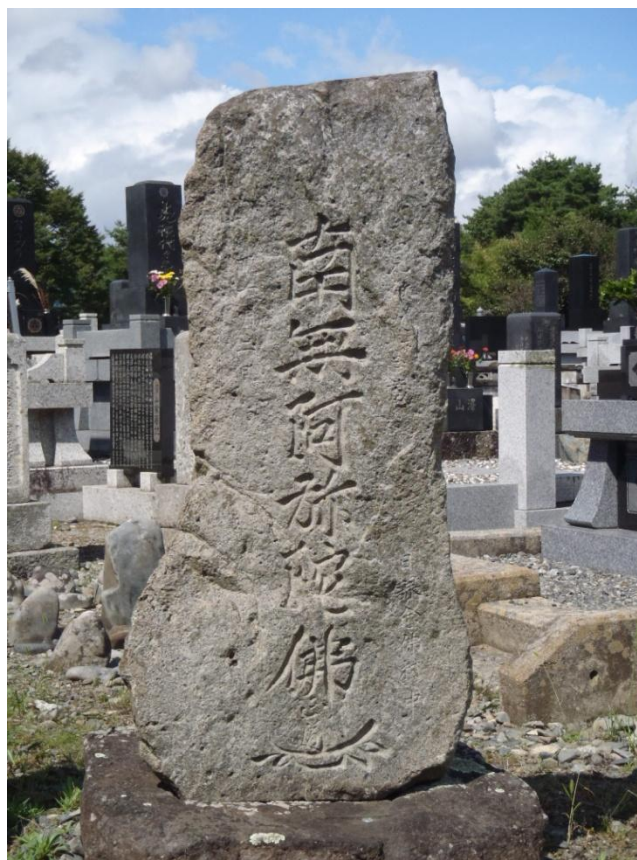
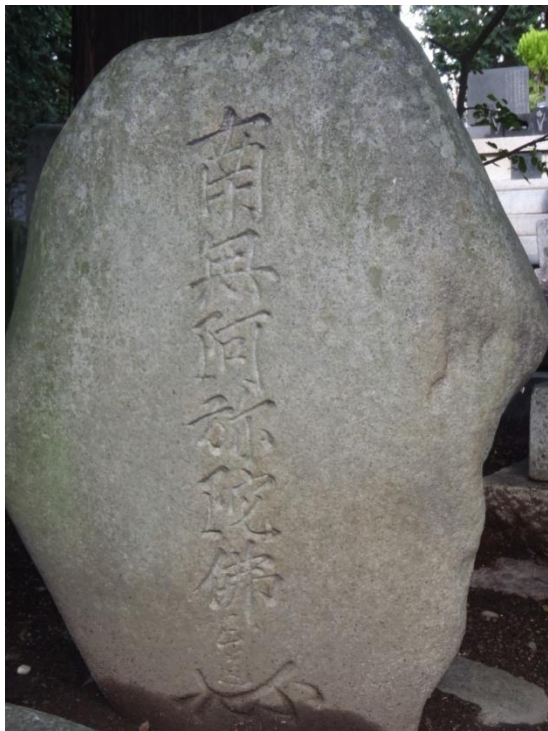


真々部殿村の二十三夜塔

4. 念仏講

(1)念仏講とは 集団(講)で念仏を唱え数珠回しを行う行事「融通念仏」⇒億百万遍 「日課念仏」

(2)念仏供養塔 念仏講普及につとめた等順、徳本、徳住、正道ら遊行僧揮号の名号札によるものと
そうでないものとある。



法蔵寺境内(左)と熊倉寺村墓地(右)の正道揮号名号碑(ともに寛政 9 年<1797>)

(3)地区に残る念仏講行事

①光野田の飴撒き 春彼岸に阿弥陀堂で行う。昔は念仏終了後に米粉の団子を撒いた。

②熊倉町村に伝わる子ども念仏の行事 春彼岸に行く。念仏を唱え数珠回しを行う。

5. 福神信仰(大黒信仰・恵比寿信仰)と行事

(1)大黒信仰と恵比寿信仰の概要 大黒天の石塔は 9 基。恵比寿の石塔は未確認。



下鳥羽新切勘左衛門堰端の大黒天(大正 8 年)



成相うろたえ橋の大黒天(文久 4 年)

(2)甲子講

(3)年中行事としての恵比寿講

6. 蚕神信仰

(1)蚕神信仰の概要

(2)蚕神の碑



熊倉春日神社境内の蚕神(年不明)
(碑の上部に繭玉が 5 個彫られている)



下鳥羽上手の蚕神(明治 38 年)

7. 天神信仰と成相新田の「よいそれ」の行事

(1) 天神信仰の概要



成相八坂神社境内の天満宮碑



新田神社境内の天満宮

(2) 天神講の例大祭としての「よいそれ」

① 成相・新田両町の天満宮の例大祭として行うお練り行事(風流)

② 成相・新田両町の秋の風物詩 女の子が薄の穂をもって練る姿も見られる。

8. 馬頭観音に込められた思い

(1) 馬頭観音とは何か



熊倉寺村墓地内の馬頭観音文字碑



熊倉道傍(仏法寺近く)の像碑

(2) 馬とともに生きてきた農民の馬への厚い思い

- ①馬とともに居住が家族同然の愛情を育む
- ②馬とともに入会山へ刈敷取りに行ったり作間稼ぎには中馬となって物資輸送にあたったり、助郷の際には馬とともに労苦を共にしたりした。
- ③馬の肥やしは刈敷とからめてぜんぜ畑の大切な肥料
- ④馬のつくれ場で養生 余分な血を抜いたり馬の蹄(ひづめ)を整えたり毛づくろいしたりした。
- ⑤馬捨て場(馬の墓地)は村に一箇所設けられ墓地をあらわす馬頭観音を設置。
- ⑥馬への愛から路傍に馬頭観音をおき馬の安全無事を祈った。

□郷土色あふれる豊科の伝統行事

1. 初市(飴市)



新田神社境内の市神社



八坂神社はスサノオミコト(牛頭天王)を祭る市神社

- (1)初市(飴市)の起源 明治 15 年京都八坂神社の祭神(市神)を勧請して翌 16 年 1 月 15 日、16 日に挙行。
- (2)初市開設の理由 成相の商業振興。道祖神御柱倒しと福俵曳行の日に合わせ大勢の客を見込んだ。成相の盛況を見て明治 17 年には成相の承諾を得て新田でも挙行。
- (3)市神のお旅所 市神の仮殿を設け市神の神輿かつぎをする。市神の神輿かつぎは全国的にも珍しいせいか財団法人民俗学研究所編『民俗学辞典』(昭和 26 年刊行。序文は柳田国男)には、「信州豊科町では、市神の祭日に、市神を擔ぎ廻っていた」と記述されている。

2. 成相のデツク様祭り

- (1)近世に始まった風邪除けの祭り
- (2)伝馬人足が担うもっこに風邪の厄を背負わせた人形を各家々で入れる。
- (3)厄を背負わされた人形は細萱村境で捨てられる。

3. 玄蕃稻荷の初午祭り

◇毎年、2 月下旬から 3 月初旬の初午の日に細萱の玄蕃稻荷社で行われる。国道 147 号の除沢橋の近くに縁起もののだるまを売る露店が出る。玄蕃稻荷社で作った松本だるまは境内で売られる。このとき買っただるまは蚕の上簇のとき黒目を書き入れるという。

4. 豊科料芸祭り

(第 3 回講座で説明したので詳細は略)

5. 栗尾山満願寺への新仏迎え



栗尾街道起点(新田神社東方)



拾ヶ堰を栗尾橋で渡る栗尾街道

(1)新盆のある家では8月9日早朝に「新仏迎え」といって栗尾街道をって満願寺に新仏の霊を迎えに行く。当日は「本尊千手観音の四万八千日の縁日であって、満願寺本堂の建立の時、藩主の発意によって安筑の領民の総菩提所とされ、祖先の供養日とした」(『南安曇郡誌』第三卷下)。この日には一泊してくる。

6. あづみ野祭り



あづみ野祭りのメイン会場になる国道147号と成相広場付近

- ◇祭りとはいっても祭神のない「都市祭り」に区分。フェスティバルといえる。
- ◇昭和55年に「豊科町民の連帯と心のふるさとをつくるため」始まる。平成23年で32回。
- ◇以前のあづみ野祭りには祭りの一週間前にプレイベントとして「ミス安曇野コンテスト」が行われ、祭り自体も宵祭りと翌日の昼の祭りと二日に及んだ。
- ◇踊りの曲「あずみ野ばやし」(作詞:中野吾郎 作曲:森田公一 振付:若柳多賀三)
- ◇テーマソング「あずみ野の四季」(作曲:森田公一)